

「お姉ちゃん？ どうしたの、こんな遅くに」

「助けてえ、会社に鍵忘れて家に入れなくなっちゃったんだよ……」

少し背伸びして借りた、完全防音の新築マンション。

その一室、締め出されたドアの前で情けなく三角座りをし、泣きながら妹に電話をかけているのが、今の私だ。

「お姉ちゃん……。助けてあげたいけどさ、もう電車ないから無理だよ。近くにホテルとかないの？」

「うう……。漫喫なら……」

「じゃあそこに居な？ 会社行く前に着替えたいなら、朝うち寄っていいから。ほら、もう眠いから切るよ」

「わかったけど……。あつ待つて切らないで心細いよお、ああつ」

……切られてしまった。

私としたことが、フォローワの推し語りの飲み会で浮かれて、家の鍵を会社忘れてき

てしまったのだ。

飲み会は終電ギリギリまで楽しんでしまった。もちろん会社は閉まっていて、明日までは鍵を取りに行けない。

絶望しながら数駅先に住む妹に電話をかけたというわけだった。

「はあ……しゃーない、漫喫行くかあ……」

どうしようもない。家のベッドでのんびり推しのボイスを聞きながら眠れないのが惜しくはあるが、近くの漫画喫茶で快活に過ごさせて貰いますかね……と立ち上がった時だった。キイ、と遠慮がちに隣の扉が開く。

「——あの、すみません。お話……聞こえちゃって。良かったらですけど、僕の……使っていない部屋、お貸ししましょうか……?」

天使のような言葉と共に、天使のような顔がこちらを覗き込んできた。

# お隣の激メロ お兄さんに

ピンチを助けてもらった  
だけのはずが実は推しの  
ボイス配信者だった彼に

## Sっ気たっぷりの 甘々クリ責め

で陥落させられる話



ろくもいふさき

絢辻 透

「はっ、え、へ、部屋！？」

「はい。僕、こないだ引越してきたばかりなので、部屋ひとつ余らせちゃってて。使つてないソファ―ベッドが置いてあるので、朝まで身体休めるくらいはできるかなと、思うんですけど……」

玄関ドアから顔を出して、どこか遠慮がちにこちらの様子を伺うこの天使のようなイケメンは、高瀬 蒼真（たかせ そうま）さんという、こないだ越してきたばかりのお隣のお兄さんだ。

ピンクがかったベージュの髪は、似合う人が限られそうな明るさなのに甘い顔立ちに完璧に似合っている。細身のシルエットも相俟ってアイドル然としたルックスだ。

そのイケメンに、あの情けない会話を聞かれてしまったらしい。

「えっ、あ、聞こえて……！？ すみません私うるさかったですよね！？」

提案されたことの前に、会話聞こえちゃってたんだ、絶対迷惑だった、恥ずかしい……！とぐるぐる脳が高速回転する。

高瀬さんはそんな私を見て申し訳なさそうに眉を下げた。

「いえ、たまたま置き配の荷物取ろうとしたタイミングだったんです。それで大変そうだなって……でも、その……知らない男の部屋に入る——なんて、危ないし迷惑でした、よね……すみません」

「あついえ！ ち、違くて、びっくりしただけで迷惑だなんて……いや、というか、いいんですか、そんなの……！？」

提案自体はありがたい事この上ないが、私なんかこんなイケメンの部屋に上がらせてもらうなんて迷惑ではないだろうか……と考えてしまう。

慌ててどもりながら返事をする、安心したようにふわりと笑みを浮かべられた。

「良かった……もちろん。坂崎さんが、嫌でなければ」

「嫌なんてとんでもない、ありがたいんですけど……ただその、か、彼女さんとかは……大

丈夫なんでしょうか!？」

「あははっ、居たら流石に声かけてませんよ。坂崎さんこそ、彼氏さんは大丈夫ですか?」  
「アッハイ、私も……あの、居ないので……はい……すみません……」

笑いながら聞き返されて反省する。とんでもなく失礼な質問をしてしまった。

縮こまりながら玄関を通してもらうと、まだ新築の、木の匂いが少し残っていた。

「間取り一緒だと思いますけど一応……トイレはここで、洗面所はこっちです。自由に使って頂いて大丈夫ですから」

「はい、本当にありがとうございます……!」

(……引越したてで物が少ないんだろうけど、それにしても綺麗だな……)

インテリアだろうか、オシャレな雑誌や観葉植物なんかが置いてある。間取りは一緒に、漫画やらグッズやらでいっぱい私の部屋とは大違いだ。

廊下を抜け、ソファアーベッドが置かれた部屋に案内してもらう。

部屋は言っていた通りまだ何もなく、ソファも使った気配がほとんどない。ただ置いてだけ、という感じだった。

ありがたく荷物などを置かせてもらう。

「机や棚もまだ無くて……こんな所で申し訳ないです」

「いやいや、居させてもらえるだけでありがたいですから……！」

「ベッド使ってくださいね、広げるとそこその大きさになるんで……あ、着替え必要か。新品の服あったような、ちょっと待ってくださいね」

「えええ！？ いやいやつ、おかまいなく……！」

私の制止もむなしく、高瀬さんは部屋に行ってしまった。

がさごそと音がして、本当にいいのに……と思っていたる間に「あ、あったあった」と声が聞こえる。

「ちょっとサイズが僕用なので大きいかもしれないんですけど、Tシャツと、こっちはスウェットなんですけど、ウエスト合わないかなー……？」

「そ、そんな本当に大丈夫なんで、…………えっ…………？」

「……………ん？」

高瀬さんが持つて来てくれたTシャツ。その胸元のロゴに、見知ったデザインがあつて思わず声を上げてしまった。

恐らくあまり一般的ではない——というよりは、そのTシャツを持つているとしてもほとんど女性だろう。

それは私の推しボイス配信者「あおくん」のロゴだった。

「あおくんの…………ロゴ…………？」

「……………！？ えっ、し、知つてたんですか……………！？」

「知つてゐるっていうか、めちゃうくちゃ推してますよ！？ ほ、ほら…………っ」

高瀬さんにスマホの裏側を見せる。透明なケースの中にはあおくんのステッカーを入れていた。可愛いSDキャライラストと共に、Tシャツと同じロゴが入っている。

どうしてTシャツを持つてゐるのだろう。声は似ているけど違うトーンだし、まさか本



人じゃないだろうし……と顔を上げると、ほんのりと頬を染めた高瀬さんが戸惑いと嬉しさを滲ませた表情でこちらを見つめていた。

一泊置いてから、高瀬さんはこう言った。

「坂崎さん……僕のこと、推してくれてたんですか……？」

一旦、状況を整理したい。

お隣の超絶イケメンくんが、私の推し配信者であるあおくんだった件について。

いや、それはまだいい。超展開ではあるが辛うじて受け入れよう。

(……それで何で私は、あおくんのTシャツを着て、あおくんの隣で、あおくんの配信について話してんの……っ！????)

「あ、最近のやつ、これもお気に入り入れてくれてる。これはどんなところが良かったですか？」

「えっと、これはその、あの……エピソードトークの時の笑い声が良いな、って……」

「ほんとに？ あんまり笑っちゃうと耳うるさいかなーって思ってたんですけど、そういうのもアリなんだ」

私は全然状況を飲み込めていないというのに、高瀬さんは相変わらずニコニコしながら話しかけてくる。

普通、隣に住んでる上に鍵忘れて騒いでるような女が自分のファンだったら嫌じゃないか？ と冷静に思ってしまうのだが、全くそんなことはないらしい。

（さつきからすごい、嬉しそうなんですけど……！？）

浮き足立った様子で着替えたらし少しお話聞かせて下さい、と言われて十分後、この有様だ。

ソファ―ベッドに並んで座り、私のスマホでファンサイトの履歴を表示させられながら、延々と推しポイントを聞かれている。

「コメントもしてくれてる……あつ、NANAさん!? 坂崎さんってNANAさんなんですか、僕覚えてますよ」

「へあ……!?!」

「初期からよくコメントくれてたじゃないですか、NANAさん。うわー……こんなことあるんだ、嬉しい……」

まさか認知されてたなんて。綻ぶ顔が眩しくて目が潰れそうだ。

高瀬さん——いや、「あおくん」は、大手動画投稿サイトやファンサイトで活躍するASMRボイス配信者だ。

活動初期から応援していたものの、少し前まであまり再生数が伸びなくて、コメントも少なかった。

もっと評価されるべき……! と思って毎回のようコメントしていたが、最近はいわゆる「見つかった」状態で、ファン数も再生数もうなぎのぼり。

寂しい気持ちも少し抱えつつ、人気が出て良かった、ずっと応援するからね……！と、給料日に課金と共にコメントをするくらいになっていたのだが……。

「最近NANAさん、コメント減ってたから……飽きちゃったかなって思ってたんです。でもちゃんとお気に入り入れてくれて……そういう訳じゃなかったんですね、良かった」  
「ち、違います、最近はコメント増えたから……反応とか大変ななって……！」  
「全然そんなことないですよ。うわー、そっか、本当に嬉しいな……」

高瀬さんは呟きながら隣で自分のスマホを取り出して私のコメントを確認しはじめた。死ぬほど恥ずかしいが、アカウントが確かに「あおくん」のアイコンで、今更ながら、ほ、本物だ……と頭が真っ白になる。

「それにしても、こんなに聞いてくれてるのに……坂崎さんは僕のこと、全然気付かなかったんですね？」

「そ、そりゃ隣に住んでるなんて思いませんし！ボイスの声と普段の声って結構違うじゃないですか……！」

「……………そっか」

少し眉を下げた高瀬さんが私を見る。気付いて欲しかったのだろうか。さすがに無理ゲーだが……………！？　と思っていたら、少し屈まれて距離が近付いた。

毛穴ひとつつすらない綺麗な顔に、ひゅっと喉が鳴る。

思わず身体を引こうとしたけれど、背中を柔らかく抱かれてせき止められてしまった。

「じゃあ——こんな感じの、いつもみたいな声がいい？」

「ひええ……………っ！？」

息遣いすら感じる距離感で毎夜聞いているあのトーンが、耳に吹き込んでくる。

「ふふっ……………かわいい反応。やつぱりこういう感じが好きなんですネ」

「む、むり……………つちよ、むりですってえ……………！！」

今までは声色が違ったからか、高瀬さんとあおくんをどこか別のものだと思っていた

気がする。

けれど聞き覚えのありすぎる囁き声を出されて、本当に同じ人なんだと意識した途端に――身体が燃えるように熱くなってしまった。

「すごい、顔真っ赤になっちゃいましたね……。僕ね、越してからずっと……。あなたのこと、可愛いなあ、って思ってたんですよ」

「へ……っ？　そ……っそんな、私が、そんな、わけ……っ」

「本当ですよ。引越しの挨拶した時も、すれ違う時も笑顔でいてくれて。その上、僕のボイス好きでいてくれたなんて……。本当に嬉しい」

毎日のように聞いていた声音が耳に直接吹き込んでくる。

どうしていいかわからずに固まっていると、心配げに顔を覗かれてしまった。

憂いを帯びた瞼が瞬く。

「あ……もしかして、僕……イメージと違いましたかね。幻滅、しちゃいましたか……？」  
「えっ！？　あっいや、いやいや！　むしろ、こんな格好いい人だったなんて、って気持ち

で……！」

「本当ですか？ 格好いいって、思ってくれてたんだ……良かった」

高瀬さんは安心したように眩きながら、私のスマホをそっと取って床に置いてしまった。何も持たない手に、暖かな手が重なる。

「あ、あの、待つ……これは、えっ、あの、どういう……！？」

「……ごめんなさい、ファンの子にこんなことしちゃうの、よくないなーって思うんですけど……元々僕、あなたのこと可愛いと思ってたから……嬉しくて、抱き締めたくなっちゃって。嫌、ですか……？」

嫌とかそういう問題じゃなくて、まずその耳元で甘く囁くのをやめてほしい。でないと身体の力が抜けてしまう。

何も言えないでいると、くすつと笑われて背中に回した手に力を入れられた。バランスを崩して、ぼすん、と高瀬さんの胸に凭れてしまう。

「ん、んむ……!?!」

「ふふ……ね、坂崎さん。僕のボイスって、有料のやつで、恋人っぽい雰囲気のやつもあったと思うんだけど……聞いてくれてました?」

「うえっ、そ、そりゃ、全部聞いてるので……っ」

「嬉しい……じゃあ、こうやって……抱きしめて、耳とか、ほっぺにキスしたりしてるやつ、覚えてる?」

「あ……っ!?! ちょ、待っ……覚えて、ますけど……!」

ちゅ……♡ と、リップ音と共に耳の外側を柔く食まれて思わず高瀬さんの服を掴んでしまった。

覚えてるも何も、お気に入りでも何回も聞き返しているボイスだ。

終始甘い雰囲気のリフが声にすごく合っていて、有料だけれどすごく人気のボイスだ。まだ眠くない夜には、いつも流していた。

「あのボイスの……最後のところ、覚えてます?」

「~~~~っ、それはその、ちょっと、私の口からは……っ」



「ふふ、覚えてくれてるんですね。本当にたくさん、僕の声聞いてくれてたんだ……」

耳元から、こめかみに。そして頬へ。固まる私の顔にちゅ、ちゅ、と柔らかい唇が何度も触れては離れていく。

このままだったら、あのボイス通りだったら。そう思って身を引こうとしても、思った以上に強い力で抱き寄せられていてどうすることもできない。

「――目、閉じて」

同じトーン。同じ声。

イヤフォン越しに何度も聞いてきたその言葉が、直接吹き込んでくる。

戸惑う私をじっと見つめたまま待っている様子に、耐えきれなくてきゅつと目を……閉じてしまった。

「……ふふ。あなたって、本当に……かわいい」

ちゅ……っ♡

柔らかくて熱い唇が重なる。

キスなんて、いつぶりだろうか。社会人になってからは推し活ばかりで浮いた話もなく、だからこそあおくんの甘めのボイスに癒されていたのに。

本人にキスされているなんて、とても信じられない。夢だとしても都合が良すぎる——  
そう思っている間にも、何度となく唇が押し付けられている。

「……っ、んう……っ待……たか、せさん、んん……っ！」

「坂崎さん……ごめんなさい。ちよつと僕、止められない、かも……」

「んう、……へっ、えっ……っんむ……!!？」

ちゅ、ちゅっ、れろ……♡

熱っぽく掠れた声が頭を灼く。様子を見るように柔らかく何度か吸われたあと、驚いて少し開いた口に舌を差し入れられてしまった。

（あ……やば、頭ふわふわする、これ……っ）

甘くも激しくなるキスに力が抜けていく。支えるように回された手が気付けば腰元を柔らかに撫でていて、あ、逃げられないかも、と他人事のように思う。

「ん……キス、気持ちいいですか？　これだけで、そんなに顔とろとろにさせちゃって、たまらないな……」

「へ……？　あ……あ、うそ、待つ……ひゃ……！」

「やっぱり耳、弱いんですね……ここにもたくさん、キスしたいな……」

ちゅ、ちゅ……っ♡

すり……もにゅもにゅ……♡

ようやく唇を開放されたと思ったら、耳元を吸われながらＴシャツごとに柔く胸を揉まれる。このまま寝るだろうからと何も考えずにブラジャーを取ってしまったのを思い出して、恥ずかしさに身体を震わせると、どこか欲を孕んだ吐息が聞こえてきた。

「待つ、そ、そこだめです、高瀬さ……っ！」

「男の家に上がって、下着取っちゃったんですか？　ちょっと危なっかしいですね、あなたって」

「ひゃ……っだ、だって……うあつ、あつ♡　んん、だめ、高瀬さん……！」

「その上、キスだけでそんなにとろけた顔して、甘ったるい声上げちゃって。それっでもう、どうぞ食べてくださいって、言ってるようなものですよ……？」

すりすり……カリッ♡

カリカリカリカリ……♡♡

胸元を這っていた手が登頂部に近付き、いともたなすく乳首を見つけてしまった。わずかに伸びた爪先でTシャツ越しに引っ搔かれてぞくぞくと腰元に熱がたまっていく。

（ううつ、た、確かにブラ取っちゃったのは迂闊だったけど……！　聞き覚えありすぎる声で囁かれるから、無意識に身体ぞくぞくしちゃって……喜んでるみたいになっちゃうだけで、あ……♡　だめ、そこ、先っぽカリカリされると、頭、ばちばちして……♡）

「は……うう……っ♡　だ、だって……高瀬さんの、こえ、が……っあ、だめ、それ……っ

♡

「僕の声のせい？ ふふ、それなら嬉しいな。他の人には、こんなにとろとろの顔になって、あまーい声出しながら乳首勃起させて、誘ったりしないって事ですもんね……？」

きゅ♡ カリカリ♡

こりこりこりこり♡

ぷく……♡ と勃起上がった乳首を、からかうみたいに引っ搔かれる。それだけでぶるぶると身体が震えてしまうのに、先っぽに爪先を埋め込むみたいにしてこりこりといじられて身悶える。

「あつ、……づ♡ ひ、んう、ん……っ♡♡」

「ふふ、坂崎さんの乳首、僕の指食べちゃったね……。えっちな声可愛い……。ねえ、もっと聞きたいです、我慢しないで……？」

「やつ、♡ へ、へんな声、だから……。も、やあ、あつ♡ 待つ、うう……っ♡♡」

「変じゃないよ、エッチで可愛い、本気で感じてる声……。こっち触ったら、もっと聞かせてくれますか？」

するする……♡

腰元を這っていた手がゆるゆるのスウェットの中に入り込む。高瀬さんのサイズのそれはやっぱり私には大きくて、辛うじてお尻のところで止まっているだけだったから……あつさりとお尻に辿り着き、長い指が太ももにまで這わされてしまった。

「ひゃっ！？ 待って、そこだめ……ッ高瀬、さあん♡」

「んー……？ ふふ、うーん……どこがダメ、ですか？」

「うえ……そ、その……あの、お尻の、とこの……っ」

「お尻、もう触ってないですよ？ ちゃんとやってくれないとわからないです。ねえ、どこがダメ……？」

すりすり♡ つゝ……っ♡

絶対分かってるのに、指先は意地悪く内ももの少し凹んだところをなぞる。どうしよう、何て言えば……と思っていたら、不意に鼻先同士が触れ合った。

ちゅ……♡ と、また口付けられる。

「んう……っ♡ んむ、う……あ、だめ、あつ、くくく♡」

——ぴと♡

こすこす♡ すりすりすり……っ♡

直接的な言葉を言えないうちに、指が……パンツの、おまんこの割れ目に辿り着いてしまった。じんわりと熱を持ったそこを何度も往復されてたまらない気持ちになる。

「ねえ坂崎さん、どこがダメ？ 教えてくれないと、やめられないですよ……？」

「んうっ、くくく♡ そ、そこ、今触ってるとこお……っ♡」

「この、熱くなつてじんわり濡れてるとこ？ ここ、なんて言うんですか……？」

「ひ、ん……♡ くくくっうう……っ」

すりすり♡ ぬちゅ♡

くちゅくちゅくちゅ……♡

口を噤んでいる間に、パンツ越しに入口へ指を埋められる。滲んでいた愛液が溢れてし

まっって水音が立って恥ずかしい。

その間にも何度も、恋人みたいにちゅ、ちゅ、と口付けられていて、頭がどんどんぼんやりしてきてしまった。

「恥ずかしがってるの、可愛い……言えない？ ふふ、坂崎さんが今触られちゃってるここ……ね、おまんこ……って言うんですよ。ほら、言ってごらん？」

「ひ、っ♡ ～っやあ、恥ずかし……っんあ、あっ♡ だめ、そこだめ、ああっ♡」

「ここ好き？ ああ……好きみたいですわね、パンツの上からでも分かるくらいコリコリして、触って触って♡ ってしてる。ここはね、クリトリス、って言うんですよ……♡」

カリカリ♡ カリカリカリ♡

逃げを打つ腰を抑えられて、わずかに膨らんでいたクリトリスを布越しに引っ搔かれて、甘えたひどい声が止まらない。

（だめ、だめなのに♡ こんな、たとえ推しにだって……こんなこと、されちゃったらダメなのにな♡ おまんこくちゅくちゅいじられて、クリかりかりされて♡ きもちよくて、



全然抵抗できない♡ いつも聞いてる時より甘ったるい囁き声で名前呼ばれて、えっちなこと言われるの、むり……っ♡)

「ひいつ、うう……っ♡♡ つあ、うあっ♡ そ、んな、あつ、いえ、いえない……っ♡」  
「そっか……言えなかったら、やめてあげられないですね……ここ、もうビンビンに勃起したクリトリスに、坂崎さんのえっちなおまんこ汁なすりつけちゃうけど……言えないから、しょうがないですよね……♡♡」

ぬちゅ……っ♡

ぬるっ♡♡ ぬるっ♡♡ ぬりゅぬりゅぬりゅ♡♡

ぬるついた指で何度もクリトリスを撫でられて、気持ちよさにかくかくと腰が揺れてきてしまった。

快感に流されかける頭を振って、恥ずかしさをこらえながら口を開く。

「んう、うっ♡♡ うう……ったかせ、さあん……っ、わかった、から♡♡ いう、も……いうからっ♡」

「んー……？ ふふ、うーん……高瀬さん、おまんこいじっちゃだめえ♡ って……言える？」

「うう……たか、高瀬さあん、っ♡ お、お……おまんこ、い……いじっちゃ、だめ、です……っ♡」

「——……っ」

必死に言った途端、息を詰める気配がして恐る恐る上を向く。

熱っぽく頬を上気させた高瀬さんと目が合った途端、どさ、とソファに押し倒されてしまった。

色素の薄い髪がばさりと音を立てる。

「……ちょっと、かわいすぎますね、あなたって……」

「な、なに……っああ！？♡ だ……め、って、いった、のに……やつ、直接、っあ、やあ、あ……っ♡♡♡」

ちゅこちゅこ♡ しこしこ♡

しこしこしこしこし♡♡

息を詰めたどこか余裕なさげな掠れ声が聞こえてすぐ、パンツの中に手を差し入れられて直接クリトリスをしごかれてしまった。

強すぎる快感に濁った声が出る。逃げを打つ身体を追いかけるように片手で抱きすくめられた。

「真っ赤な顔で腰へコつかせて……気持ちいいの丸わかりなのに、一生懸命えっちな言葉言って……興奮させるの、上手すぎます……」

「くそ、そんな、つもりじゃ、っああ♡ お、おしえたら、やめるってえ、んんっ♡」

「ふふ……うん、この濡れ濡れのおまんこいじるのは、やめますね。クリトリスだけ……こ  
うやって、ちゅこちゅこしてしごくんで、こっちで気持ちよくなりましょうね……♡」

「やつ、やあ、そんな……っあああ♡ だめ、そこも……んん……っ♡♡」

ちゅくく……っ♡

ちゅこちゅこちゅこ♡ しこしこしこ♡

すっかり勃起してつまめるようになっていいるそこを、ぬるぬるの指で何度も扱かれて足

先に力がこもる。

慌ててそっちもダメって言おうとしたのに、塞ぐように唇を奪われて何も言えなくなつた。

(だめ♡ キスだめ♡ 頭ふわふわしてきちゃう、あまーい声でいじわるされて、クリし  
ごかれて♡ だめなのに、絶対こんな……もう、きもちよすぎてクセになっちゃうのに♡  
きもちよくて訳わかんない、あ、あ♡ このままイきたいって思っちゃう、腰揺れち  
う……っ♡)

「ふ……唇、震えてる。もしかして、イきそうなの我慢してます……？」

「~~~~っうう……っ♡ だめ、なのにい……うあ、っあ♡ つま、つまむの、や、ああ……っ♡」

「うん、うん……ダメなのに、気持ちよくてイっちゃいそうだね……♡ かわいい、坂崎さん……いいよ、イクとこゼーんぶ、見てるから。ね、クリちよっとしごかれただけでアクメしちゃうとこ、僕だけに見せてください……？」

ぬりゅぬりゅっ♡

こりこり♡ こりこり♡ こねこねこね♡

興奮した囁き声を聞くほど頭に火花が散る。イきそうにひくつく身体に合わせて何度も繰り返し捏ねられて高まっていくばかりだ。

止めようもない喘ぎを愛おしげに聞かれて、いよいよ視界が真っ白になった。

「ふうあ、あ、むり、たかせ、さあん♡ も、あ、きちやうう……っ♡」

「うん、きちやうね……ふふ、いいよ、クリいっぱいしごかれて、きもちよくイこうね。ああ……すごいな、えっちな顔かい……ん、もうイクね、イっちゃうね……♡」

「ああっ、……っひ、うう♡ だめ、イっちゃ……たか、せさ……っイクう、うう、ああっ、  
~~~~っ♡♡」

びく……っ♡ びくびくびくっ♡

背筋を思い切り逸らし、足先までぴいん……っ♡ と伸ばしたえっちな体制のまま、導かれるようにしてイってしまった。

イっている最中、ずっとクリトリスを指で抑えられていて、それがまた気持ちよくて絶

頂が長引く。イききったあと、余韻でびくびくする身体をぎゅっと抱きしめられて頭の中がふわふわしてしまった。

それなのに。

「あー……かわいい、ほんと……ごめん、坂崎さん……ちよつとしんどいこと、しちゃうかも。ごめん、ね……？」

「へ……あ、あ、あつ！？　ま、って、っ！？♡♡　だめ、たかせ、しゃ、今だめえ、ほ、ほんとに……♡」

すりゆすりゆ……っ♡

いったばかりで敏感なクリトリスを、また撫でられて腰がビクついた。敏感すぎて快感よりもつらさが勝つ。

続けるように顔を上げると、興奮しきった視線とがち合った。

「僕ね、もつとあなたのえっちな声聞きたいんです……でも、おまんこ触っちゃダメでしょう？　だからクリ触るしなくなつて。おまんこいじつてもよかったら、やめてあげられる

んですけど……」

「そ、っあぁ♡ だめ、くり、うぁぁっ♡ くり、づらい、から♡ も、たかせ、しゃん、ゆるしてえ……っ♡」

「うん、うん……っらいですよ……許してあげたいです、僕も。だから、ね、おまんこ、いじっていい……？」

甘い声でとんでもないことを言われている気がする。するけれど、ずっとちゅこ♡ ちゅこ♡ とイったばかりのクリトリスを撫でられていても何がなんだかわからない。腰が引けるのも抑えられていて逃げ場がない。

とにかくやめてほしい一心で、こくこくと頷いた。

「うう、いっづ、も、いいからぁっ♡ くり、やめてえ……っふぁ、あ……あぁぁっ！？♡」

ずぶ……っ♡

ぬちゅ♡ ぬちゅ♡ ぬぶぶ……♡

頷いた途端ぴたりと止んだ刺激にほっとしたのも束の間、ぬりゅん♡ と濡れそぼった

おまんこに指を這わされる。

だめ、入っちゃう——そう思っておなかに力を込めたのに、何の抵抗もなくナカへと侵入されてしまった。

「っああ……すごいな、坂崎さんのナカ、とろとろなのに……指一本でも、キツキツですね。もしかして、こういうの……されたこと、ないですか？」

「はっ、ひ……♡ な……ないですっ、ないから、やめ、っあ、んん……っ♡」

「僕が初めて……？ そっか、そうなんだ。嬉しい……痛かったら、教えてくださいね。あなたのこと、気持ちよくしたいだけだから……」

ぬぷ♡ ぬぷ♡

ぬちゅぬちゅぬちゅ♡♡

ナカをゆっくりと割り開かれる。粘ついた水音と共に入り口を何度も往復されて、ようやく受け止めきれだけの快感が訪れて体が震えた。

意地悪なのに声音は甘く、指先は優しく、頭がとろけていく。

絶るように抱きつく、愛おしい視線と共にキスが降ってきた。



「ん、んう……♡ ふう、う、う……♡」

「ん……ふふ、声もとろけちゃいましたね、坂崎さん。すっごく可愛い……大丈夫？ 痛くない？」

「うあ……？ あ、えっと……いたくは、ない……です……っあ、うあ、あっ……♡」

「良かった……ああ、ここ気持ちいいですか？ このざらざらしたところ撫でると、入り口きゆうきゆう締まりますね……」

こりっ♡

こりゅこりゅこりゅ♡

お腹側の、触られるたびに声が出てしまうところを何度もこすられて、はっはっ♡と犬みたいな声が出る。やめてほしかったはずなのに、さっきクリトリスをいじられたせいで絶頂感が引かなくて、もっと強い快感を求めてしまう。

こんなにすぐイきたがつてるのをバレたくなくて顔を背けると、今度はいつものボイスよりも熱のこもった囁き声が鼓膜に響いてきた。

「ダメ、堪えないで？ 僕におまんこのナカぬぼぬぼいじめられて気持ちよくなってること、ちゃんと意識してください……？」

「~~~~やつ、やあ、あっ♡ むり、むり、です、そんな……んんっ♡」

「どうして？ 僕しか見てないですよ、ほら、さっき言ったからもう言えますよね。おまんこ気持ちいい♡ って、言ってごらん？」

「や、ああっ♡ そんな、はずかしっ……うあつ、あつそこ、ぐりぐりだめ、だめえつ、ああっ♡」

（さっきイったのに♡ いつもひとりでするときは、イったら終わり、なのに♡ きもちいいのずーっとされて、またイきたくて腰かくかくするの止めらんない♡ あおくん、いつも、ボイスではもっと優しい感じ、なのに……♡ おんなじ声で意地悪なこと、言われて♡ なんでこんな、興奮しちゃうの……っ♡）

ぬっぽ♡ ぬっぽ♡

くりゆくりゆ♡ とちゅとちゅとちゅっ♡

弱いところを繰り返し責められていよいよ腰が浮いてくる。自分から触って♡ って言

うみたいに高瀬さんの手に押し付けてしまつて恥ずかしいのにやめられない。

甘い声と指に掻き回されて、次第に、きもちいい、イきたい、しか考えられなくなつてしまう。

「ふ……ぼーっとして腰振つてるの、えっちすぎますね……。坂崎さん、ここ気持ちいい……。？」  
「あ、あ♡ん、ううっ……。き……。……つきもち、い……。っ♡」

「ふふ、いい子……。うん、ここね？ 坂崎さんがくちゅくちゅいじめられちゃつてるここ——おまんこ、だよ。坂崎さん、おまんこ、気持ちいい……。？」

「——う、う……。♡んんっ、たか……。高瀬、さあん♡ お……。おま、んこ……。っ、おまんこ、きも、ち、いい……。♡♡♡」

もう何も考えられない。

うわごとのように繰り返したその瞬間、褒めるみたいに優しいキスが降つてきた。

「……はー、ほんと、かわいい……。坂崎さん、初めてなのに、おまんこで気持ちよくなれて、えらいね……。♡」

「ん——うう、っあ♡ん、きもち、い……っあ♡おまんこ、きもちい……っあ、あ、だめ、またくる……っ♡」

とんとんとんっ♡

こりゅこりゅこりゅっ♡

導くように弱いところを突かれて身体が震え出す。勝手に背筋が伸びていく。

もうだめ、もういく——そう思った瞬間、耳元に触れるほど寄せられた唇が、いいよ、と囁いた。

「だめ、あつ、あつ♡もおいく、たかせさ……イク、イ、……っくう、ああああ……」

びくびくびく……っ♡

ぶるぶるっ♡びくっ♡びくびく……っ♡♡

今までしたことのないほどの強く深い絶頂に、頭が真っ白になる。

何度もビクついた身体がようやく落ち着く頃、ぎゅ……っ♡と抱きしめられて、一気

に力が抜けていく。

「はあ……ふふ、ナカでもイけてえらいね。すつごく可愛かったです、坂崎さん……」

「……たか、せ……さん、……わ、私……」

「頑張ってくれてありがとう……大丈夫ですか、……坂崎さん？」

「だめ、かも……ごめ……なさ……」

「坂崎さんッ、大丈夫——」

急激に頭に靄がかかってしまった。視界がぐらついて、声が遠のく。

そういえば私、そもそも結構飲んでたんだ——と思いながらも言うことはできず、そのまま視界がブラックアウトした。

「坂崎さん、坂崎さん……ごめん、僕……、あなたが、……あなたの、こと——」

高瀬さんの声が、はっきりと聞こえたのはそこまでだった。